

曾我十郎五郎の分担

——「さはがぬ男」と「たまらぬ男」——

小井土 守敏

『曾我物語』の仮名本系諸本は、主人公である十郎祐成と五郎時致兄弟について、兄を「さはがぬ男」、弟を「たまらぬ男」もしくは「こらへぬ男」と記す。

巻第六「虎が盃十郎にさしぬる事」に次のような記事がある。和田義盛は、大磯での酒宴に虎と十郎を同席させ、虎に、自分か十郎に「おもひざし」を強要する。千々に思いを巡らせた後、虎は十郎の盃に酒をさす。

九十三ぎの人々も、よしひでのかたをミやりて、事やいできなるといふめきたるてい、さしあらハれたり。十郎もとよりさハがぬおのこにて、なにほどの事があるべき、事いできなハ、なん十人もあれ、よしもりとひつくんで、せうぶをせんずるまでとおもひきり、あざわらひてぞあたりける。(流布本 巻第六 仮名本系諸本ほぼ同)

句読点、濁点等は稿者 以下同)

十郎を「さはがぬ男」と評している。このように評するのはこの箇所のみである。この和田義盛との酒宴の記事は、真名本系諸本には載らない。つまり、十郎を「さはがぬ男」とするのは、仮名本系諸本に見られることなのである。

第五郎について「たまらぬ男」と記すのも仮名本系諸本である。巻第

五の「五郎と源太と喧嘩の事」の章、浅間の狩に敵討ちの機会を狙うべく密かに同行していた兄弟が、梶原源太景季に見とめられる場面で、五郎は、

五郎、こらへぬおのこにて、たちとりなをし、あらことぐし、さう人に、めハはかくまじ。げんだがこまの、むかふずねなきおとさん、よもこらへじ。おちんところをさしころし、ハらきるまでとつぶやきてあにをおしのけかゝりけり。(同)

と記される。

また、同じく巻第五「三浦与一をたのみし事」で、敵討ちの宿願を縁者の三浦与一に語り、助力を求めるが断られてしまうという記事に、

十郎きゝて、いとおかしの人や、心ミんとていひつるを、まことしかほにせいするぞや。いまだきわれらが身にてハ、思ひもよらず。むまもたざれバ、かりばも見たからず。ゆめくひろうあるべからずと、くちをかためてたゝんとす。五郎ハたまらぬおのこにて、ことにはじめのことバにハにず。おもへバおそろしさにじたいし給ふか。(同)

とある。

「さはがぬ男」とは、慌てふためいて混乱したり動揺したりすることのない男のことであり、「たまらぬ男」「こらへぬ男」とは、我慢できない男、感情などを抑えられない男のことである。この「さはがぬ男」「たまらぬ男」ということばは、曾我兄弟各々の性格を対照的に定義づける表現なのである。

こうした、兄弟各々の性格を対照的に定義づけることばは、そのことばが載るか載らないかという問題にとどまらない。真名本系から流布本

系へ、そのことは明記されるに至るまでには、十郎の「さはがぬ男」ぶりと、五郎の「たまらぬ男」ぶりが随所に見られるようになってゆくのである。

『曾我物語』における曾我兄弟二人の対照的性格については、水原一氏をはじめ、諸先覚に御指摘がある通りであるが、本稿では、兄弟に分担された人物造型を跡付け、分担されることによつて『曾我物語』に登場する兄と弟が不可分な一体の主人公となつてゆく様子について、私見を述べてみたい。

二

曾我兄弟は、敵討ちの助力を近親の二人の人に求めている。すなわち、京の小次郎と冒頭で引用した三浦与一とである。いずれも兄弟の申し出を断るのであるが、断られた後の兄弟について、それぞれの性格の描き分けが見られる。

箱根を下り、元服を果たした五郎は、母に勘当を受けたことを契機に、十郎に敵討ちを急ぐよう迫る。十郎は同意すると共に、京の小次郎を味方に付けようと提案する（巻第四・小次郎かたらひ得ざる事）。それに反対する五郎を説得した十郎は、小次郎に兄弟の宿願を語る。しかし、頼朝を恐れた小次郎は兄弟の依頼を断る。事態は五郎の懸念した通りになり、五郎は深く後悔するとともに激しく怒る。そして五郎は、

于レ時五郎時宗申、去来十郎殿、不レ漏ニ此事、先失ニ京小次郎、我等仕態誰不レ思者云、
（妙本寺本 巻第五）

いざ此事もらさぬまきに、いそぎ小次郎がほそくびうちをとし、九万八千のいくさ神のまつりニせん。我らが我らがしたるとハ誰かハ

しるべき。 （太山寺本 巻第四 仮名本系諸本ほぼ同。）

と、小次郎を殺害しようと提案する。諸本を通じて五郎がこのように提案することは共通している。真名本系諸本と、仮名本系諸本のうち太山寺本では、この五郎の主張は十郎によつて制されるのであるが、それ以外の仮名本系諸本では、五郎が再度主張するように描いている。

これハむざいをころすにてハ候はず。かゝるふかく人、うざい共、むざい共、ことバにたゞざるやつをバ、いそぎいとまをくれ候べきにて候。（流布本 巻第四 太山寺本以外の仮名本系諸本ほぼ同。）

最終的には十郎の説得によつて制されるのであるが、太山寺本以外の仮名本系諸本では、五郎はあくまでも小次郎を殺そうと主張するのである。兄弟の宿願が第三者に漏れたことに対して、五郎が殺害することによつて口を封じようと主張する件は、諸本に共通する。この五郎の主張からも、五郎の激しい気性が強調されていると言える。しかし、太山寺本以外の仮名本系諸本は、五郎に再度主張させることによつて、すぐに力に訴えようとする彼の強硬かつ剛胆な性格を強調するのである。

冒頭で引用したように、三浦与一に助力を断られる場面において、仮名本系諸本では、特に五郎を「たまらぬ男」と評する。真名本系諸本にはこの表現は見られない。ただし、

五郎聞ニ余一詞、縁際馬引寄、既乗、態聞顔声高申、向ニ駈程不覚人ニ云ニ合斯大事、口惜、不ニ人々ニ者聞ニ左許大事ニ云打出
（妙本寺本 巻第六）

と、座敷を立つた後、与一に聞こえよがしに悪口を言うという行動を通して、五郎の激しい気性は描かれている。この場面が仮名本系諸本では、「かほばかり八人にて、たましいハたゞちくしやうにハおとりたる

物かな。」といひすて、「ふみころしてもあかず。」との、しりて出にけり。

(太山寺本 巻第五 仮名本系諸本ほぼ同。)

となつてゐる。五郎の怒りの感情は座敷を去るまでもなく、与一を眼前にしながら罵倒するという行為によつて噴出する。その罵倒のことばも、「人々しからぬ者」としてゐた真名本系よりも仮名本系諸本の方が「畜生にも劣る」と相手より蔑んだ表現となり、「踏み殺しても足りない」と怒りの色も頭になつてゐる。

諸本を通じて、五郎は気性の激しい人物として造型されている。しかし、真名本系諸本に比して仮名本系諸本では、五郎はより一層短気で激しい気性の持ち主として描かれてゐるのである。

三

兄弟のうち特に兄は、宿願の敵討ちとは無関係な、女性に関わる件で争いに巻き込まれそうになる。それらの記事の多くは真名本系諸本には見られず、仮名本に至つて増補された記事と考えられる。それぞれの記事における兄弟の言動は、兄弟それぞれの性格と役割を明確化してゐる。

十郎が伊東に住んでいた頃から馴れ親しんだ女性は、他家に嫁いだ後も十郎のもとへ手紙を送つてきた。それを知つた夫の三浦平六兵衛義村は、内々十郎に疑いをかけていた。三浦で偶然出会つた義村と兄弟のやりとりが以下のように記されている(巻第四・平六兵衛が喧嘩の事)。

(義村は)むねとの物共十きばかりあひくして、此人、のかくれぬたるふねのかげにおしよせ、「誠や、との原ハよしむらがざい京のあひだにありときくハ。」とにがくしくいひけり。一人あらバうちもちがふ程のきしよくなり。十郎事共せずあざわらつて、「いか

やうのものゝさんそうにてや候らんとたつねきこしめし候へ。か様の次第けんざむに入、ちきにうけ給る事、しよゑんのしるしと存するなり。たとい身にあやまりあり共、一度は御めんも候はで。」とぞ申ける。

(太山寺本 巻第四 仮名本系諸本ほぼ同。)

ここに描かれる十郎は、義村が怒りの色も頭に問ひかけた言葉に、「事ともせず」に「あざ笑ひ」ながら対応するのである。それも、義村を諭すような、あるいは義村の怒りを煽るような口調で。義村の気色にも動揺することのない、冷静な十郎がここに造型されてゐるのである。一方、この問答を傍らで聞いていた五郎については、

五郎はせひをばしらで、平六ひやうへがいかる気しきを、やうありと思ひければ、うつほより大のかりまたぬき出し、矢さきをよしむらにさしあて、一やおもへるかほだましい、あらはれてぞ見えし。

(彰考館本 巻第四 仮名本系諸本ほぼ同。)

と記される。冷静な兄に対して、すぐさま行動を起こそうとする弟五郎として描かれるのである。そして、

よしむらは、五郎がいきをひを見て、「まことに大ちからのをこのものなり。かりのせうおしてはそんなり。後日をこそ」と思ひしづめて、

(同)

と記されるように、五郎の形相は、相手を萎縮させるに十分なほどの気魄に満ちてゐるのである。この一件を、語り手は、

此人々のしきよはく見えなば、すなはちちがへぬべきていなりしかども、五郎が思ひきりたるいろを見て、こともなくうちすぢぬ。

(同)

と、兄弟が弱そうに見えたなら刃傷沙汰となることを、五郎の気魄によつて事無きを得たと、五郎のこの大胆な行動を評価するのである。

また、兄弟の伯母婿にあたる三浦の別当は、片貝という女性に情をかけていた。それを不快に思う兄弟の伯母は、十郎を呼んで、片貝を十郎のもとに預けようとする。その一件でも、十郎は冷静な人物として描かれている（巻第四・三浦の片貝が事）。

別当に無断で、十郎が片貝を連れて行くと勘違いした別当の郎等達は、片貝を奪回すべく十郎を追う。郎等達は今にも狼藉に及ぼうとするのを、十郎八身に思あり、「かたきうちたへてもゑきなし。いかにもしてのがれバヤ。」とおもひけれバ、身づからゆミのつるをおしきり、なげ出し、「ちんずる二にたれども、身にきてハとがをおぼえず。さりながらこのやうにハあるまじけれども、べちニおもふ子細あり。しぜんの事あらば思ひ候べし。」といひければいざわの平三がいひけるハ、「此上ハ。」とてミなうちつれてかへりけり

（太山寺本 巻第四 仮名本系諸本ほぼ同。）

と、十郎は冷静に対処する。そして、この場面の十郎の心境を、語り手は以下のように語る。

十郎は、ちぢに腹をきり、うちちがへても、あかずと思ひけれど、父のためにそなへおきたる命、おもはざることに、はつべきかと思ひ、自害をのがれけるこそ、無慙なれ。（同）

敵討ちのためには、怒りの感情をも抑え、冷静な態度をとる十郎⁵なのである。そして、語り手はこの十郎の対処を評価するのである。

冒頭で引用した大磯での盃論の場面は、仮名本系諸本のみに見られるものである。真名本系においても和田義盛との酒宴の記事は見られるが、仮名本系諸本に描かれるような緊迫した場面は全くなく、

和^レ田^レ殿^レ何^レ副^レ身^レ如^レ影^レ被^レ尋^レ五^レ郎^レ殿^レ、候^レ曾^レ我^レ留^レ主^レ被^レ申^レ、其^レ詞^レ未^レ了^レ、五^レ郎^レ門^レ内^レ樋^レ入^レ、和^レ田^レ殿^レ見^レ之^レ流^レ涙^レ、哀^レ契^レ不^レ違^レ者^レ哉^レ、是^レ々^レ被^レ為^レ酒^レ宴^レ、成^レ晚^レ、和^レ田^レ殿^レ、暇^レ申^レ殿^レ原^レ被^レ立^レ（妙本寺本 巻第五）と、円満に終わる。

仮名本系諸本、巻第六「虎が盃十郎にさしぬる事」では、冒頭で引用したように、虎の「おもひざし」によって座敷に緊張が走る場面がある。その場面における十郎は、「十郎もとよりさハがぬおのこにて、なにほどの事があるべき、事いできなハ、なん十人もあれ、よしもりとひつくと、せうぶをせんずるまでとおもひきり、あざわらひてぞあたりける。」と記される。十郎は、「さはがぬ男」とされ、五郎の「たまらぬ男」と好対照をなす人物として造型されている。

この時、曾我の里にいた五郎は、しきりに胸騒ぎを覚え、兄の危機を察知し、大磯へ駆けつける。案の定、座敷で不穏な動きがあることを知った五郎は、障子を隔てて兄の後ろに立つ。十郎はそれに気づくと、

せんまんぎのつハものを、うしろにもちたるよりも、たのもしくぞ思ひける。（流布本 巻第六 仮名本系諸本ほぼ同。）

と、安心するのである。距離を隔てて兄の危機を察知し駆けつけるといふ記事は、兄弟が不可分の一体のものであるということを示している。兄弟が互いに好対照をなす人物として造型されているために、互いを必要とする必然性が生じ、兄弟の絆の深さが示されているのである。

そして、後ろに控えた五郎は、なに事もあらバ、しやうじ一系ふみやぶり、とびいで、一のたちにてよしもり、二のたちにてあさいな、そのほかのやつばら、なん十にんもあれかし、ものゝかずにてあらばこそと思ひきり、四しやく六寸のたちつえにつきたつ。しのびかねたるありさまハ、たう八

びしやもんの、あくまをがうぶくし給ふかとぞおほえける。(同)と記される。五郎の形相は、ここでも気魄に満ちている。緊張した座敷で、益のない争いを危惧した朝比奈義秀は、酔った振りをして五郎を座敷に招こうとする。朝比奈と五郎の草摺引きの力くらべて五郎の大力ぶりを描いた後、持っていた太刀や草摺で座敷の人々の顔を殴りながら座に着くという、五郎の不敵な態度が記される。その態度は、「その時の振舞座敷に余りてぞ見えし」と語り手が感想を漏らす程である。

真名本系には見られないこの記事は、兄十郎の冷静さ、第五郎の剛胆ぶり、そして曾我兄弟の絆の深さを物語るものなのである。

仮名本系諸本は、このように、新たに記事や場面を設定し、兄弟それぞれの特徴を顕著に表現している。兄弟は、それぞれの特性が対照的であればあるほど、深い絆で結ばれるのである。

また、特に五郎については気魄に満ちたその形相が記される。兄弟の容姿については、仮名本系諸本において、兄弟の母の目を通して以下のように語られる。

(五郎は)山寺にてそだちたれども、色くろく、下種しくみゆる。

十郎は、里にすみしかども、色しろく、尋常なり。わが子と思ふ故にや、いづれも清げなる者共かな、いかなる大将軍といふ共、はずかしからじ物を。(十行古活字本 巻第七 仮名本系諸本ほぼ同。)

兄弟は、その性格だけでなく容姿も対照的に記されるのである。

四

兄弟は、頼朝が行う各地の巻狩に密かに随行し、敵討ちの機会を狙う。兄弟が敵討ちを遂げる記事までに、仮名本系諸本においては、真名本系

諸本には見られない多くの障害が設定されている。それらの障害を、兄弟それぞれがどのように役割を分担して克服していくか、前節同様検討する。

建久四年四月下旬、頼朝が信濃浅間野から三原野、那須野へと巻狩を行う。兄弟は、姿を変えて頼朝の一行に付き従い、宿々で仇敵祐経を狙うが、好機を得ることができない。これら一連の巻狩は、兄弟二人にとって何ら収穫もないまま終わってしまうのである。太山寺本を除く仮名本系諸本では、碓氷の宿で祐経を付け狙って屋形を徘徊していた兄弟が梶原源太景季に呼び止められるという記事が見られる(巻第五・五郎と源太と喧嘩の事¹⁰)。

源太、これをひかへつつ、「これなる者どものあやしきよ、とゞまれ」とぞとがめける。十郎たちかへり、笠の下より、「和田殿の雑色也」といふ。「それは何としてしのおそや。名をば何といふぞ」

「藤源次と申者なり。和田殿、御所ゑまいられ候つる暇をはかり、御屋形の次第を見物つかまつり候。義盛かへる時になり候間、いそぎかへり候」といふ。

(十行古活字本 巻第五 太山寺本以外の仮名本系諸本ほぼ同。)

源太の尋問に冷静に対処する十郎が記されている。しかし、この直後、源太の郎等によって、十郎の偽証が見破られてしまう。この時、冒頭で引用した、「こらへぬ男」五郎が描かれるのである。執拗な源太の尋問に五郎は我慢がならないのである。太山寺本以外の仮名本系諸本では、こうした敵討ちへの障害となる小競り合いを設定し、五郎はすぐに大胆な行動を起こす人物として造型されるのである。折よく和田義盛が通るかかり、兄弟は義盛の弁護によって騒動を起こすことなくこの場をのが

れるのだが、この後、十郎が五郎を以下のようにたしなめている。

「身におもひだになくは、いふにおよばず。心のものにかゝりては、いかでかさやうの事あるべき。源太うたん事は、いとやすし。はれらが命もいきがたし。さては、梶原をうたんとて、心をつくしけるか。向後は、こゝろへ給ひて、身をたばゐ、命をまつたくして、心をとげたまふべし。返すぐ。」

(同)

ここに描かれる十郎も、やはり敵討ちを最優先する人物であり、加えて行き過ぎた行動を起こす弟を制する役割をも担わされているのである。

この源太との一件があつた晩、兄弟の潜む屋形に義盛からの差入れが届く。そうとは知らない兄弟は、屋の一件による源太の襲撃と間違える。

五郎は、太刀おつとつて、すでに屋形をいでんとす。十郎、袖をひかへて、「しづまりたまへ。屋こそあらめ、夜なれば、一方うちやぶりて、しのばん事いとやすし。たとひ何十人きたるといふとも、まづ一番をきりふせよ。二番つゞきて、よもいらじ。まして三番しらむべし。たとひのりこえきり入共、梶をなぎふせよ。かまゑて、御分はなるゝな。へだてられてはかなふまじ。いそぎて、外へはいづべからず。隙間をまもりて、もろともにいで、のがればのがるべし。もし又、のがれがたなくは、さしちがへてはしぬるとも、雑兵の手にばしかゝるな」といひつゝ、脇にたちよりに、「今やいる」とまぢかけたなり。

(同)

第五郎は、血気にはやる大胆な男であり、兄十郎は、その弟の行動を制し、冷静にかつ迅速に対策を立てる男である。「祐成、案者第一の男なり」という評価を得る人物なのである。十郎がまず逃れることを念頭に置くのは、勿論彼らの敵討ちという宿願のためである。

兄弟は、頼朝の主催する富士野の巻狩に、敵討ちの最後の機会と決意して密かに随行する。その場面においても、仮名本系諸本では真名本には見られない場面が設定され、兄弟それぞれの特徴を表す言動が描かれている。

兄弟は、敵討ちを果たす晩、和田義盛に最後の対面をすべく義盛の屋形を訪問する(巻第九・和田の屋形へゆきし事)。この件は諸本に共通して載るが、仮名本系諸本では、梶原源太との小競り合いが再び設定されている。義盛は敵討ちという言葉は聞きつけ不審を抱く。兄弟を激励する。その言葉を、通りかかった源太が聞きつけ不審を抱く。義盛の取りなしによつて源太はその場を退くが、その時に五郎が、

御ちはうをもちいずして、申とをる物ならば、なに程の事が候べき。ほそくびきりてすてゝべきものを。

(太山寺本 巻第九 仮名本系諸本は同。)

と放言する。短気で剛胆な五郎がここでも描かれる。また、なおも立ち聞きしていた源太が「この物ハあさいなニミぎわまさりの大ちからのおこの物ときゝたり」(同)と、この場での勝負を避けたというくだりからも、五郎の強さあるいはその風聞の程が窺える。義盛の屋形から帰ると、十郎は、源太の襲撃に備え屋形を替えることを五郎に指示する。

十郎申けるハ、「梶原が御ふんのこと葉をたちぎゝつる。せいもちがほ二よせ来りぬべしとおほゆるぞや。屋形をかへん。」といひければ、五郎きいて、「源太ほどの物がなん十人もあれ、いち／＼にきりふせん。ことぐし。」といふ。すけなり聞て、「身に大事なくばいふ二をよはず。たゞそれがしにまかせよ。」とて

(同)

ここでも、知略に長け、源太の行動を予測しうる十郎と、短気で剛胆な五郎とが描かれている。また、五郎が短絡的に力に訴えようとする、十

郎がそれを制する、という役割分担が、ここでも繰り返されるのである。この記事に続けて、十郎の予期通り源太が無人の兄弟の屋形を襲うという記事を添え、十郎の深慮が正当なものであることを補強するのである。

兄弟は、曾我へ文をしたため、従者を帰し、ついに仇敵祐経を討つたに出発する。真名本系ではその様子を、

抜三太刀、肩打懸、手々打振小続松二行高物語、既欲打入二時、

(妙本寺本 巻第九)

とのみ記す。兄弟は、「高物語」をしながら、祐経の屋形に辿り着く。

しかし、仮名本系諸本では、まだいくつもの難関が兄弟を待ちかまえているとするのである(巻第九・屋形くの前にてとがめられし事)。

狩場の宿所には、盗賊・火災を警戒し、厳しい警護網が布かれている。兄弟はこうした警護の者に、通る先々で呼び止められるのである。

まず兄弟は、座間と本間の人々の屋形の前で警護の者に尋問される。

ここは十郎が、「土屋殿の使者」と偽り、通過する。

次に千葉介の屋形前で呼び止められる。今度は五郎が「身内の者」と偽り、強引に木戸を通過しようとする。しかし、五郎の強引さが警護の者の不審を呼び、木戸を閉ざされてしまう。これに対し五郎は、

五郎ハ、きどをたてられて大ニいかりていひけるハ、「くるしからねバとほらんといふ。くるしき物のふるまい、おうごしよへがうたうに人物ぞ。とゞめんとおもハんともがらは、くミてとゞめよ。」といひければ、番のものども是をき、
「夜いんのひやうしハなんのゆへぞ。かやうのらうせきしづめてぞ。とゞめよ。」とて、おつかけたり。五郎も、「心へたり、ことぐし。」とて、たちおつ取なをしまちかけたり。(太山寺本 巻第九 仮名本系諸本ほぼ同)

と、すぐに力に訴えようとするのである。「たまらぬ男」五郎がここにも描かれている。この事態に対し、十郎は、

十郎、少もさはがず、しづくと立帰、「是は、さらにくるしからぬ者にて候。麿南殿より北条殿へ、大事の物の具の候、取に参候が、夜ぶかに候間、人をつれて候へば、わかき者にて、酒にゑい候て、雑言申候。たゞそれがしに御免候へ」と、うち笑てぞいたりける。

(十行古活字本 巻第九 仮名本系諸本ほぼ同)

と少しも動揺することなく偽るのである。しかし今度は警護の者も不審を解かず、十郎の偽証を追求する。窮した十郎は、警護の者どもの中へ進み出て、

御分たち、われくをば見しり給はずや。麿南殿の御内に、弥源次・弥源太とて、兄弟の馬屋の者也。いつぞや、宇都宮殿、北山への御出の時、見参に入候しをば、わすれ給ひ候や。(同)

と、更に偽り警護の者を欺く。「さはがぬ男」十郎の、冷静さと機転の良さが窺える。特に万法寺本・王堂本・十行古活字本及び流布本では、富楼那の弁舌によって波斯匿王の怒りを鎮めたという説話を引いて、十郎の冷静な対処を語り手が評価している。

こうしてこの場を通過した後、十郎は、

かやうの所にてハ、いかにもかうをこうべきに、御ぶんのざうごん心へず。こうしのこと葉ハき、給ハずや。事を見てハいさむ事なかれ。大事のまへ二小事なしとこそしめされて候へ。

(太山寺本 巻第九 仮名本系諸本ほぼ同)

と、五郎を戒めるのである。兄十郎は、彼が最優先する敵討ちを遂げるために障害となるものに対しては常に冷静で、勇む弟五郎を制する人物として造型されるのである。

仮名本系諸本では、この他に祐経が屋形を変えろという障害を設ける。このように新たに難関を設定するということは、敵討ちを遂げることの難度を高めようとしていることである。そして同時に、これらの難関を克服してゆく場面は、「案者第一」の「さはがぬ男」十郎の知略を描く場面なのである。

五

真名本系諸本では、兄弟の性格をそれぞれに特徴を持たせて表現する記す記事を含まない。つまり兄弟の性格は未分化であると言える。真名本系諸本では、勇む弟とそれを制する兄というような構図は固定的には見られない。状況によっては弟が兄を制するような場面もあるのである。仮名本系諸本に至り追加された数々の記事において、兄十郎の冷静で思慮深い性格と弟五郎の短気で剛胆な性格という、その相違は明確に分化された。それぞれの性格が単純化されたとも言えよう。そうして兄弟は、「さはがぬ男」十郎と、「たまらぬ男」五郎と評されることになるのである。

仮名本系諸本において、性格が対照的に分化されたことによって、兄弟それぞれが物語の中で担う役割は分担され、『曾我物語』は劇的なものへと変容した。つまり、兄弟が敵討ちを遂げる記事までに様々な障害を設定し、敵討ちをより困難なものとする。そしてそれらの障害を、兄弟それぞれが担っている役割を果たしつつ克服していくのである。十郎の窮地には五郎がその大力と不敵な態度で兄を救い、「たまらぬ男」五郎の多少行き過ぎた行動によって陥る窮地を「さはがぬ男」十郎の知略に長けた取りなしによって脱す。兄は窮地に陥るに至った弟の短絡的な言動をたしなめ、また、窮地を想定し対策をたてる思慮深い人物である。

弟は、感情を抑えることができず、すぐに力に訴えようとする短気な人物である。それに、紙幅の都合で詳述できないが、敵討ちを遂げ十郎討死の後、存分に力を発揮し、囚われの身となった後も頼朝の前に広言するほどの剛の者である。そして、兄弟いずれの性格——その性格が生み出す言動をも含めて——も、語り手の賞賛に値するものなのである。

「曾我兄弟による敵討ち」を物語る『曾我物語』にとっては、兄弟の窮地はそれぞれが小さな山場である。そうした山場——時には不自然な設定をも含みながら——を重ね、最大の山場である「敵討ち」を迎えるのである。兄弟の性格が対照的であればあるほど、敵討ちのために兄弟の絆は深まる。冷静さと大胆さを分担する兄弟は、不可分である。『曾我物語』仮名本系諸本に描かれる曾我兄弟による敵討ちは、対照的な性格を有する兄弟二人が揃って初めて成し得るものなのである。

〔注〕

(1) 日本古典文学大系『曾我物語』解説の分類による。仮名本系諸本については、以下のテキストを用い、引用する。

太山寺本 濱口博章氏『太山寺本曾我物語』(昭和六三年・汲古書院・影印)

彰考館本 村上學氏・徳江元正氏・福田晃氏『彰考館本 曾我物語 上中下』(昭和四六・五三年・伝承文学資料集第四、六、十輯・三弥井書店)

方法寺本 清水泰氏『曾我物語(方法寺本)上中下』(昭和三五年・古典文庫一五四、一五七、一六一冊)

王堂本 穴山孝道氏『王堂本 曾我物語 上下』(昭和一四・一五年・岩波文庫)

十行古活字本 市古貞次氏・大島建彦氏『曾我物語』(昭和四一年・日本古典文学大系・岩波書店)

流布本(整版本) 国文学研究資料館蔵 寛文十一年刊本

- (2) 本稿で示した章段名は、流布本に拠った。
- (3) 真名本系諸本については、以下のテキストを用い、引用する。
 妙本寺本 『真名本曾我物語』(昭和四九年・勉誠社・影印)
 大石寺本 静嘉堂文庫蔵本
 なお、妙本寺本の読み下しにあたっては、以下を参照した。
 角川源義氏『妙本寺本曾我物語』(昭和四四年・貴重古典叢書刊3・角川書店)
 青木晃氏・池田敬子氏・北川忠彦氏・笹川祥生氏・信太周氏・高橋喜一氏・福田晃氏『真名本曾我物語1・2』(昭和六二〜六三年・東洋文庫四六八、四八六・平凡社)
- (4) 『曾我物語』では他に八幡三郎(巻第一・河津がうたれし事)、『平家物語』では重盛(巻第二・烽火之沙汰(寛一本))、『義経記』では頼朝(巻第四・頼朝義経対面の事(十二行木活字本))が「さはがぬ男(人)」と記されている。八幡三郎は、工藤祐経の命によって、大見小藤太とともに兄弟の父河津三郎祐重を殺害した人物である。
- (5) 『曾我物語』では他に山内滝口太郎(巻第一・おなじく相撲の事)、高山六郎重保(巻第八・源太としげやすがしゝろんの事)が「たまたらぬ男」として登場する。滝口は大力の者で、重保は狩り場の獲物を巡って梶原源太と喧嘩をする人物である。
- (6) 現存する真名本である妙本寺本と仮名本系諸本の直接の関係は希薄なため、妙本寺本を真名本系諸本の一本と考え、仮名本系諸本は、真名本系別本に基づいて成立したものと考えられる。しかし、物語の流伝の方向としては、真名本系諸本から仮名本系諸本、そして流布本へと考えてよからう。
- (7) 水原一氏『曾我兄弟——愛の間人画像——』(国文学解釈と教材の研究・昭和四三年八月・学燈社)、徳江元正氏『曾我兄弟——曾我物語——』(国文学解釈と教材の研究・昭和四九年三月臨・学燈社)などに、兄弟の対照的性格と兄弟の絆について御指摘がある。
- (8) 拙稿「大磯の虎をめぐる十郎祐成の描かれ方——『曾我物語』諸本間に見られる相違——」(『筑波大学平家部会論集』五・平成七年11月・筑波大学平家部会)において、仮名本における十郎の人物造型について私見を述べた。
- (9) 妙本寺本にも、
- (10) 而程鎌倉殿召具諸国侍共、成辰初、建久四年四月下旬出録會中、打超氣幸坂、過柄沢、飯田、着武蔵国関戸宿 (巻第五)とあるが、『吾妻鏡』の記事によれば、頼朝の出發は建久四年三月二日である。
- (11) 仮名本系諸本、巻第八「屋形まはりの事」で、図らずも仇敵祐経の屋形へ招かれた十郎が、退出後も小柴垣に隠れて祐経たちの様子を窺う場面に、この記述がある。
- (12) 妙本寺本では、「宇都宮の屋形」とする。
- (13) 注8の拙稿にその点について触れるところがある。
- (14) 村上學氏が、「歴史的なリアリティ志向と周到な積み重ねをしたストーリーの展開により内面的および外的に必然性を以て人物像の変容を生じるといったダイナミックな物語構造の真字本と、単一固定的な性格を有する諸人物が対立しながらもそこには葛藤による変化などは生じない平面的な疑似劇的世界、いわば万華鏡ふうの世界構造を有する仮名本ということになるのである。」と述べておられる。(『曾我物語の基礎的研究』所収「真字本と仮名本のストーリー構造」昭和五九年・風間書房)
- (15) 和田義盛は、『曾我物語』の中で終始兄弟に好意的・協力的であるが、第二節で取りあげた大磯の盃論の場面でのみ敵役となっており、内部矛盾を生じている。この点に関しては、村上學氏(注14前掲書)をはじめ諸先賢に御指摘がある。
- (こいど もりとし 筑波大学大学院 文芸・言語研究科 学生)